「日々の理科・田中」（第 71 号） 2014 (H26),-8,29

「幻のハマグリ」

貝殻の本来の役割は、内骨格を持たない貝類の体（軟体）を、衝撃や外敵から守ることです。硬組織の一種で「生体鉱物」でもあります。別に人間の目を楽しませる為に進化したわけではありません。しかし貝の中には、どう見ても偶然にこの形状が生まれたとは思えない、芸術品と言えるものもたくさんあります。

日本産の貝で、特に珍重されたものの一つに、オオイトカケガイ（大糸掛貝）があります。以前、封書の郵便料金が 62 円だった時に発行された切手に描かれていた、あの美しい貝です。かつては相当な金額で海外のコレクターの間で取引されていたそうです。

「オオイトカケガイ 62 円切手」
「貝シリーズ切手」の一つです。ああ、あったあった！と思われるでしょう。封書の郵便料金が 62 円だった時代のもので、現在は発行されていません。消費税値上げで、封書の郵便料金が再び 82 円と半端になったので、20 円切手を足せば使えるようになりました。下についているカラーマーク（印刷色見本）付きは、１シート（100 枚）に１枚しかないので、切手コレクターの間では珍重されます。

私は「かいがい旅行」によく行きます。行き先は神奈川県の江の島です。江ノ島神社の参道（坂道）に貝の標本を売る店が多いのです。つまり「海外旅行」ではなく「貝買旅行」です。ずいぶん前に、その店の一つで、私の目を釘付けにした貝がありました。

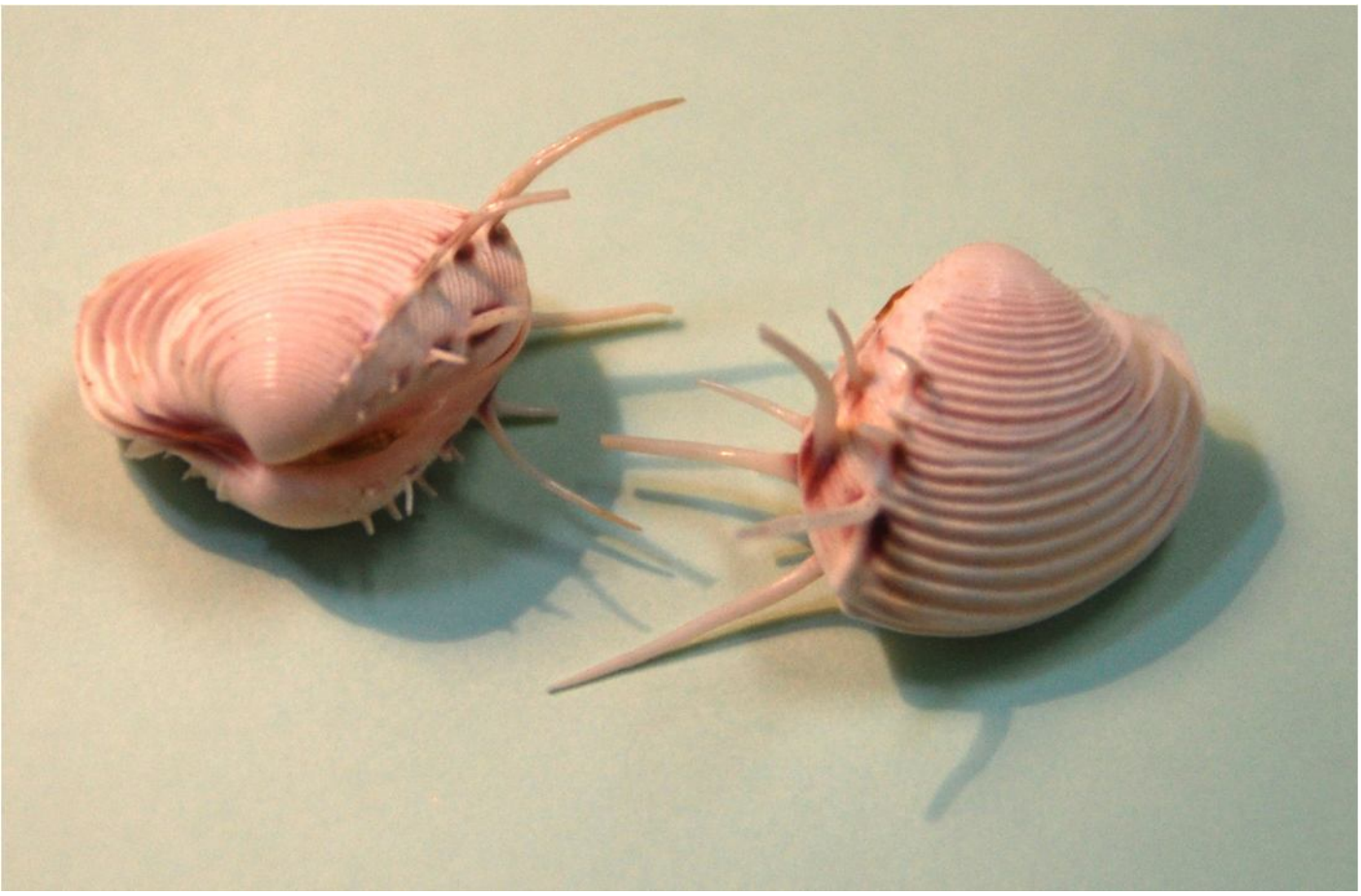
その貝は小さな二枚貝だったのですが、たくさんのトゲがある、誠に美しい姿でした。店のショーウィンドウの真ん中にあったので、看板商品だったのでしょう。いかにも大切そうに展示してあります。その名も「マボロシハマグリ（幻蛤）」。値札がついていないので、非売品なのかと思い店の人に聞いたら、売り物だと言います。姿も仰天なら、価格も仰天（〇万△千円）！しかし、その仰天価格でもどうしても欲しい！・・・と思うほど、美しく奇異な姿だったのです。こんなに高い貝、どうせすぐには売れっこない！と勝手に決めて、その日は別の安い貝（ニシキツノガイとジャノメタカラガイ）を買って、トボトボと引き下がりました。

かくして、私は魂を江ノ島に残してしまいました。帰りの電車の中で、早くも買わなかったことを後悔し始め、家に帰ってもまったく落ち着きませんでした。当然夢にまで出てきます。「居ても

立ってもおられない」とは、まさにあの状態を言うのでしょう。２日後、私は再び江ノ島に舞い戻っていました。大金を持参して。

はやる気持ちを抑えられず、片瀬の駅から江ノ島の参道まで、私は逃走犯のように猛ダッシュしていきました。何か急がないと、あの貝がなくなってしまうような気がしてならなかったのです。そういう悪い予感は的中するものです。あのショーウィンドウに、すでに貝がなかったのです。３度目の仰天をして、店の人に聞くと「昨日売れたよ」と、事もなげに言います。「肉まんは売り切れだよ」と何も変わらない調子です。私は、「あー、あの時に！！」と後悔し、激しく地団駄踏みました。その衝撃で、もう少しで江ノ島は沈没するところでした。私にとっては文字通り「幻のハマグリ」になってしまったわけです。

それから十数年、マボロシハマグリは文字通り幻のままだったのですが、ついに、ようやく、やっとの思いで、とうとう（その他 20 種類の修飾語）、入手できました。しかも２個！



「マボロシハマグリ」（マルスダレガイ科） *Hysteroconcha lupanaria*
カリブ海から南米沿岸の浅い砂底に生息します。貝の刺には外敵からの防御と、姿勢を安定させる役割があるそうですが、このトゲはいずれにも長すぎます。刺は非常にもろく、完全な標本はまずありません。これでも刺がきれいな部類の標本です。海外のオークションサイトから入手、金属のケースに厳重に梱包された国際書留で届きました。（西メキシコ San Carlos Guaymas 産）

私はこの貴重な標本の話を子どもたちにして、一人ひとり手のひらに載せてあげました。そういう気持ちは子どもに伝わるのですね。子どもたちは壊さないようにと、手を震わせながら観察していました。

（お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋）